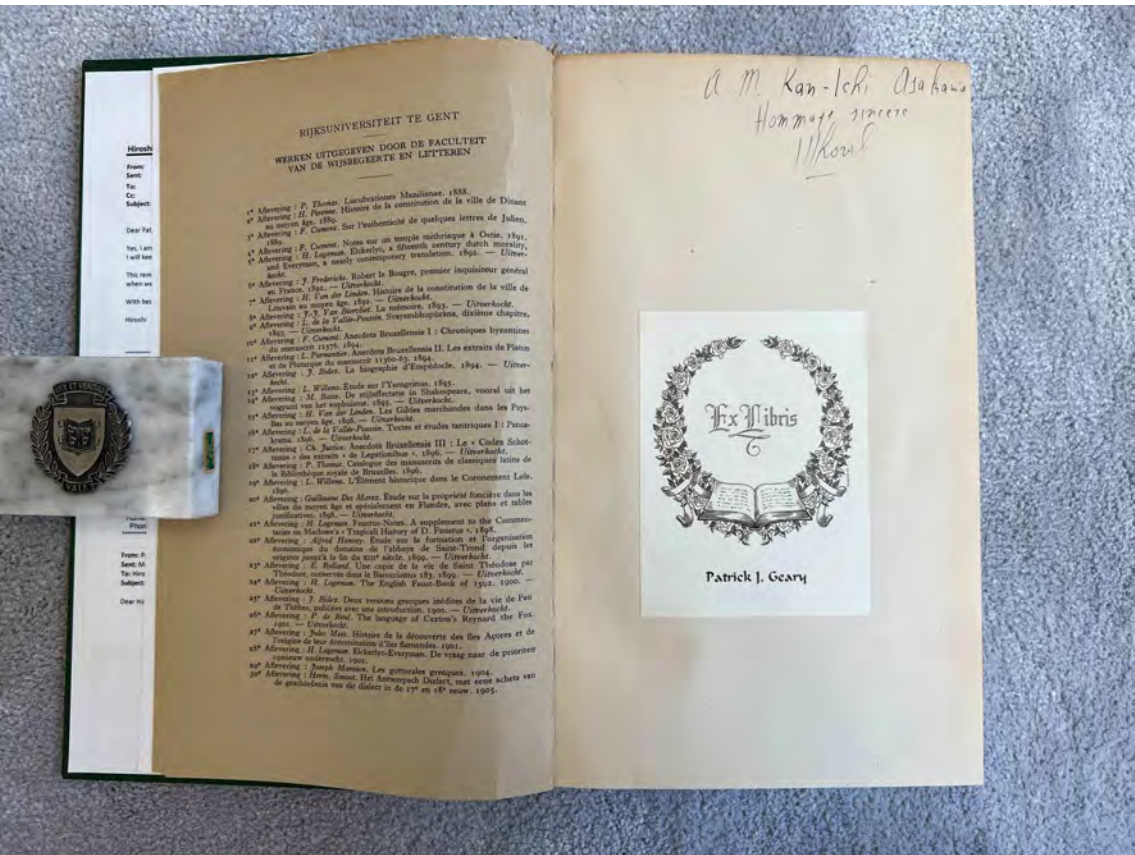


地中海学会月報（ウェブサイト用）

「プリンストン高等研究所の思い出と旧友との再会」

高山 博



これは、ベルギーの中世史家 J・ドントが 1948 年にブルージュで刊行した本の写真である。稀覯本というわけでも高価な古書というわけでもないが、私にとっては特別な意味をもつ、かけがえのない存在である。

新型コロナウイルス感染拡大が始まる直前の 2019 年 9 月から 12 月にかけて、私はアメリカのプリンストン高等研究所(Institute for Advanced Study, Princeton)に滞在した。1930 年創設の当研究所は、プリンストン大学の附属施設と誤解している人もいるが、同大学とは

まったく別の組織である。この研究所は、学生をもたず、27 名の教授と世界各地から招聘される約 190 名の研究者から構成されており、アインシュタインやフォン・ノイマン、オッペンハイマーなど、その時代を代表する優れた科学者たちが集ったことで知られている。現在は、歴史的研究、数学、自然科学、社会科学の四部門から成る世界有数の研究機関である。

私が定年退職前の特別研究期間を利用してこの研究所の所員に応募したのは、この研究所が科学者になろうと思っていた幼い頃からの憧れの場所であったことに加えて、研究者人生を始めたばかりの時期に大きな影響を受けた K・セットンと G・コンスタブル、そして、旧来の友人 P・ギアリがここの歴代の中世史教授だったからである。中世地中海研究、とりわけ、十字軍研究の泰斗セットンは、私が大学院生時に書いた最初の英語論文原稿を送ったときすぐ返事をくれ、アメリカの学術雑誌に投稿するよう強く勧めてくれた。西欧中世宗教史・修道院史研究の碩学であり、ハーバード大学で教鞭をとっていた G・コンスタブルは、私のイエール大学大学院での指導教授 J・ボズウェルが愛弟子だったため、私をアカデミック・グラントサンと呼び、大学院生だった頃から長きにわたって励ましや助言を与えてくれていた。そして、西欧中世社会文化史の第一人者であり、私と同じイエール大学大学院出身の P・ギアリと最初に会ったのはアメリカ中世学会トロント大会に参加した大学院生の時だったが、その後、イタリア、ドイツ、日本、アメリカの国際集会や研究所で再会し、西欧中世の人的集団に関する多くの議論を交わした。わが国の西洋中世学会創設の際には、アメリカ中世学会会長として祝辞を送ってくれた。また、当時彼が勤務していた UCLA の中世・ルネサンス研究所に CMRS Distinguished Visiting Scholar として私を招聘してくれた。

2019 年秋に私が Willis F. Doney Member としてプリンストン高等研究所での生活を始めたとき、ギアリは既に現役を退いた名誉教授となっていた。ゆっくり話す時間が取れると期待し再会を楽しみにしていたが、残念ながら、彼は住居を西海岸に移していたため、三カ月の滞在期間に会うことはほぼ不可能な状況だった。ほとんど諦めていた頃、コロラド大学

(ボルダー校)の友人から驚きのメールが届いた。この友人は、私の講演会を組織し準備していたコロラド大学教授だが、私の講演会が開かれる 11 月 12 日(火曜日)に、別の組織の企画でギアリの講演会が開催されることになったという。奇跡のような偶然だった。

講演会前日の早朝、私はプリンストン高等研究所の宿舎を出発し、ニューアーク空港とデンバー空港を経由して、コロラド州の高原の町ボルダーのホテルに到着した。翌日の午後に自分の講演をおこなった後、ギアリ教授の講演を聞きに行き、その後は二人で懇親会のディナーに参加し、再会を祝した。翌 13 日には二人一緒に朝食を取り、朝食後は主催者の友人によるボルダーの街案内に参加する予定だったが、彼女の体調不良のため、二人だけでロッキーマウンテンの観光をすることにした。ウーバーを利用してロッキーマウンテンの中腹まで上り、街までの下り道をゆっくりと歩きながら、それぞれの研究の現状や教育状況、最近の日米の学界・学会の動向、それぞれの家族についてなど、様々な話題について話した。その時には、第二次世界大戦前から戦後にかけてイェール大学教授であり、私の心の中の師であった朝河貫一についても語り合うことができた。今から振り返れば、偶然が重なった結果、1 日半というずいぶん長い時間を二人だけで過ごすことになり、忘れられない貴重な時間だった。

プリンストンに帰って 4 日後、研究所の自分のオフィスに行くと、机の上に J. Dhondt, *Études sur la naissance des principautés territoriales en France* (Bruges 1948) が置かれていた。表紙をめくると、朝河貫一の署名が記され、ギアリの蔵書印が押されている。パソコンにログインすると、彼からの次のようなメッセージが届いていた。「ロバート・ロペスが何年も前にその本を私にくれた。日本からイェールへ、そしてまたそのもとへと伸びる中世研究者のチェーンの一部としてその本は君が持つべきだと思う。朝河貫一はアメリカの一流大学の最初の日本人教授であったというだけでなく、アメリカと日本の友好的な関係を根気強く唱道していた。朝河は私が生まれる一か月前に亡くなったが、彼にはずっと親近感を抱いてきた。私たち自身の永続する友情のしるしとして君がこの本を受け取ってくれることを願っている。」

ロバート・ロペスはイエール大学の教授であり、西洋中世商業史・経済史の第一人者だった。私がイエール大学大学院に入学してまもなく亡くなっており会うことはできなかったが、私が大学院で博士課程を修了し博士号を授与された時、ロペスにちなんだ Robert S. Lopez Memorial Prize（最優秀中世史博士論文賞）を受賞することができた。その受賞がその後の私の研究の大きな励みになった。ギアリから贈られた本とそのメッセージを見ながら、ここに記した偶然の重なりと、そして、長い時間をかけ世代を超えてつながった研究者たちの深い絆に静かな感動を覚えた。朝河寛一、ロバート・ロペス、パトリック・ギアリ、そして私までつながったこの J・ドントの本は、今、私の書斎の机の上にあり、いつも私を励ましてくれている。